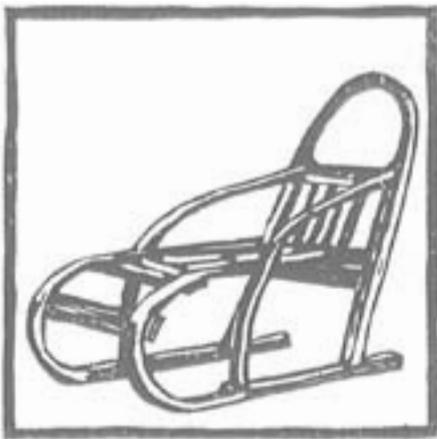


ホワイト・イルミネーション

夜空に輝く光のページェント

亀谷 隆



「子供用櫛」 版画・谷口二郎（札幌）
大正末～昭和初期に考案され、職人たちは
「文化櫛」「曲げ櫛」と呼んだ。

★光を求める北の人

かつて、人は火を神として神事を行い、太陽と月の光を時として天地を占うなど、光との関わりは世の東西の文化や芸術に見ることができる。現在の北海道のシンボルは七光星であるが、かつての開拓使時代のシンボルは五光星であった。その名残がサッポロビールの星のマークで、元々、「開拓使札幌麦酒製造所」であった工場を払下げられた経緯からである。

この五光星、軍艦の旗印として、明治5年2月に開拓使が決めたが、9月に開拓使次官の黒田清隆が、七光星に変更するよう政府に願ったが、却下されたという。おそらく北斗七星を気にしたのではと推察される。

星は本来、円形である。しかし、星からの光が目には届いた時には、放射状に光を放しているように見えるのは何故かである。

ある眼科医は、放射状に見える光を光芒^{こうぼう}と呼び、左右の眼球が完全なる円ではなく、左右に僅かな凹凸^{わず}があって軸対称でないことから発生するとし、水晶体の透明度が薄れる高齢者ほど光芒を強く感じるという。

また、気象学者は、冬の札幌の上空には強い西風であるジェット・スリームが吹き、大気密度が不規則になりやすいため、星の光の屈折が強く、瞬きが大きく見えると言う。

★暗かった大通での迷子

昭和54年（1979）の暮れの夜、札幌市の大通に面している広告会社での会議があった。

この会社、日中はビルの屋上に社旗を掲げているから訪ねる時は、その旗を頼りに行くことができたが、夕暮れにはその旗は降ろされてしまうので、ビルを探すのにも一苦勞をし、結果として迷子になってしまった。仕方なく電話をかけて、ビルまでの案内を聞く始末となった。

会議室に到着するや否や、担当のディレクターに「広告会社であれば、クリスマスも近いのでビル前の木に豆電球を使ってツリーでも飾れば？」と迷子の負け惜しみを含めて提案した。

その後、会議でのディレクターから食事の誘いがあり、その時の会話で「先日のツリーの話ですが、豆電球の電気代負担をどうするかで悩んでいるんです」とのこと。

「スポンサーを付ければ済むのでは？」と返答したら、「そうですね、日常、我々は紙や電波での広告しか考えていなかったから、気が付かなかった」との返事で、翌年冬には豆電球でのクリスマスツリーが、迷ったビル前に飾られ、今度は夜でも迷うことなく、遅刻することもなく会議に出席できた。

後日、雪降る寒い夜、単なる豆電球のみの光のツリーを見ては、慣れ親しんだ形から「あっ！クリスマスツリーだ」と口にし、大通を行き交う人たちの姿を見ることができた。

★クリスマスツリーを飾る

もともと、クリスマスツリーはヨーロッパ中世の楽園劇に由来するとされ、『創世記』の生命の木と関連し、最古の記録は1600年ころに書かれた

『シュレットシュタット年代記』に見られると言われる。

日本にクリスマスが伝わったのは、明治7年(1874)とされ、明治31年(1889)に発行された『さんたくろう』(三太九郎と当字している)に、痩せたサンタクロースがモミの木を抱え、プレゼントを入れた籠^{かご}を背にしたロバと一緒に絵が描かれている。後日、ディレクターと会い、「なかなか、試しとは言え、人気があるようで」と褒めたたら、「実は来年は本格的にホワイト・イルミネーションと命名して開催します」とのこと。「えっ！クリスマスツリーでは？」と聞き返すと「クリスマスの期間を過ぎても街を楽しい雰囲気にしたとのこと」での返事で、1年間かけてスポンサーを募った結果、多数の企業がイルミネーションに参加することになった。

そのイルミネーションも、大通から駅前通に拡がり、最近では町内会などでもイルミネーションを楽しみ、なかには一軒の家がアメリカ・ラスベガスのような光景を見せている家もある。

★サンタクロースとクリスマス

サンタクロースは、英語で「サンタ・クロース」、ドイツ語で「ヴァイナハツマン」、フランス語で「パール・ノエル」、イタリア語で「バッポ・ナターレ」、スペイン語で「パパ・ノエール」、ロシア語で「ディエート・マロース」と呼ばれ、これらを発音してみると、何とはなしにそれぞれの国らしさが耳に届く思いがする。

サンタクロースと聞くと、筆者が昭和49年(1974)に関わった「北方圏環境会議・生活環境展」という博覧会を思い出す。

この展覧会は、北半球に位置する国や州を対象とし、各地域の自然、産業、生活などを紹介する催事で、この時、北欧での漁業事業をしていた日本人と知り合いになった。

その人は北海道浦河町出身で、ある時、フィンランドの国が話題になった時、その人は「北海道にサンタランドを設置したいがどうだろうか？」との相談を受けた。

「北海道は本州と比べ、少なくとも異国的と言われているし、サンタも世界的な人物であるから我々が目指す北方圏構想に合致するので、賛成で

すよ」と返答し、協力をも約束した。

その会話から10年を経過した昭和59年(1984)、浦河町と背中合わせに位置している広尾町に「サンタランド」が開設され、毎年、子どもたちがサンタクロースが住むフィンランド・ロヴァニエミからカードが贈られてくるのを楽しみにしている。一方、クリスマスはキリストのミサの意味で、英語で「クリスマス」、ドイツ語で「ヴァイナハテン」、フランス語で「ノエル」、イタリア語で「ナターレ」、スペイン語で「ナビダー」、ギリシャ語で「クリストウゲナ」と呼ばれ、Xmasと綴られるのは、ギリシャ語での頭文字であるXを組合わせているからである。

ついでであるが、ロシア語では「ラジディストヴォー」と呼ばれ、どこかのストーブの名称のようなイメージである。

平成6年(1994)、函館の西部地区にあるレンガ倉庫群の中に、衣料販売会社であるフェリシモがクリスマス研究者であったイギリス人のマリア・フォン・スタウファー伯爵夫人のコレクションを譲り受け、イギリスやキリスト教と関わりのある函館で公開すべく、「フェリシモ・クリスマスミュージアム」を開設した。

その後、函館市では毎年12月になると西部地区の波止場で、カナダから贈られた大樹に多数の発光ダイオードを飾り付け、ファンタジックな光のページェントを繰り広げており、広尾町のサンタランドとともに北海道のロマンを感じさせている。



profile

亀谷 隆

かめや たかし

1943年函館市に生まれる。武蔵野美術大学卒業。公立中学校教諭、市立函館博物館、北海道開拓記念館に勤務し2006年退職。北海道大学、北海道東海大学講師を歴任。現在、北海学園大学講師(博物館学)、特定非営利活動法人公共環境研究機構理事長、北海道博物館協会会員、北海道北方博物館交流協会評議員、地域文化開発研究会主宰など。

谷口 二郎

たにぐち じろう

1932年富良野市に生まれる。北海道大学文学部卒業。北海道庁に勤務し1990年退職。約30年にわたり北海道の自然や生活道具などをモチーフとした版画制作の活動を続けている。